

「タイ・フィールド調査 参加報告書」

京都大学教育学部・4年 藤川ともみ

①プログラム内容

講義やフィールドワーク、企業訪問など、様々な方面からタイへの理解を深められるプログラム内容だった。全12日間のうち前半9日間はバンコクに滞在し、タマサート大学でタイやASEANに関する講義を受けた。そのうち一日は、タマサート大学・チュラロンコーン大学・京都大学の三大学の学生による学生ワークショップに参加し、それぞれの研究内容について発表・質疑応答を行った。Study tourでは、日系企業（AEON Thailand）や現地企業を訪問したり、アユタヤを見物した。

後半3日間滞在したプーケットでは、パイナップルプランテーションやオーガニック農園の見学といったフィールドワークが中心だったが、知事との対談や労働局を訪問する機会もあった。

②学習成果

今回のタイ研修を通じ、アジアに対する自分の認識がぐんと広がったと感じる。まず、自分がこれまで持っていたアジア観というのは、「アジア＝（日中韓辺りの）東アジア」という偏ったものであったことに気付いた。東南アジアへ行ったことがなく、出会ったアジア人の友人がほぼ全員、東アジア出身だったためだと思う。今回タイに滞在し、ASEANについて学んだことで、アジアが宗教も政治形態も言語系統も異なる国々が集まっている地域であることを、初めて実感することができた。

またタイ以外のASEAN諸国出身の学生や先生方と話す機会も多くあったことから、東南アジアのアイデンティティのようなものも感じた。東アジアが文化や言語に共通点を持っているように、やはり東南アジアの国々にもASEAN独自の共通性や連帯感が存在すると感じた。

タイに限らず東南アジアの国全般に対し、これまでにない親近感や興味を持てるようになったことが今回の一番の学習成果だったのではないと思う。

③海外での経験

東南アジアの国に滞在したのは今回が初めてだった。バンコクの中心地などは、巨大なショッピングセンターが立ち並び、日本の都会と同じような光景だった。しかし、そのすぐ向かいの通りには露天商の屋台がひしめきあっていたり、道路にはトゥクトゥクが走っていたりと、やはり異国だな、と感じさせる風景が広がっていた。経済成長に注目が集まる東南アジアの国について、日本でも毎日のようにニュースで耳にするものの、やはり実際に行ってみて、自分でその様子を見ることのできたのは刺激的だった。

また今回の研修は、京大からの参加学生の国籍もバラバラで、そのような国際性豊かなメンバーの中に加わったこともとても良かった。訪れたのはタイ一国だったが、彼らと話すことでそれぞれの母国が身近に感じられるようになったし、移民政策や男女格差についてなど、色々な意見を聞くことができたのも面白かった。

④進路への影響

私は卒業後日本企業の海外進出に関わる仕事に就くことを予定しており、海外で働きたいとも考えている。今回のフィールド調査への参加を志望したのも、日系企業が多数進出しているタイについて理解を深めたいとの思いからであった。今回のプログラムは、タイについて、政治・歴史・経済・農業など様々な面から学ぶことができ、非常に有意義だった。タイがぐっと身近になった上、アジアで働く、というイメージをより具体的に持つことができた。

また今回は、外国企業を多数受け入れているホスト国の側から、その進出を考えるという貴重な機会にもなった。ある講義では、タイが経済発展の国策として外国企業を積極的に誘致したものの、利益は企業の本国に吸収され、ホスト国が受ける恩恵は少ないという議論が紹介された。自分は日本企業の海外進出に関わることで、日本の発展に貢献したいという気持ちがあったが、日本のことしか考えていなかったことにハッとさせられた。今後、経済や東南アジアについてもっと勉強しなくては、という意識が生まれた。

今回このような素晴らしいプログラムに参加させて頂いたことを心から感謝しています。プログラム運営のために奔走して下さった先生方、アジア研究ユニットの皆様、ありがとうございました。